



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	沖縄における夫の家事参加 - 沖縄総合社会調査2006による分析 -
Author(s)	安藤, 由美
Citation	人間科学 = Human Science(27): 205-218
Issue Date	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24759
Rights	

沖縄における夫の家事参加 — 沖縄総合社会調査 2006 による分析 —

安藤 由美
Yoshimi Ando

Husband's Housework in Okinawa: An Analysis Using the Social Survey of Okinawa 2006

キーワード：沖縄の家族、性別分業、夫の家事参加

1. 夫の家事参加研究

本稿では、沖縄本島中南部全域を調査地とした沖縄総合社会調査2006のデータを使い、夫の家事参加の頻度と、これを規定する要因に関して若干の検討を行う。夫婦間役割分担について、これまで学術的および政策的な調査で何が明らかにされているかといえば、まずは、夫婦間の家事分担や家事従事時間の妻への著しい傾斜である。とくに、日本の夫は、欧米先進諸国に比べて、家事従事時間は著しく少なく [総務省統計局 2007]、また、相対的に強い性別分業観を有している [内閣府 2006]。そして、このことは研究の関心を、妻ではなく、夫の家事参加を左右する要因の解明へと向かわせてきた。というのも、夫が家事をよく分担するなら、妻の家事従事時間も減り、仕事と両立できる可能性も高くなるはずであるけれども、実態としては、妻の家事従事時間は、彼女が仕事をもっているか否かにはあまり影響されていないからである。そこでは、後でも少しふれるように、夫の職業、ライフステージごとの家事の要求度 (デマンド)、代替資源、イデオロギー要因などが夫の家事参加の規定要因として指摘されている [永井 1992 & 1994; 岩井・稲葉 2000; 松田 2004&2006]。

沖縄でも、少なくとも都市部においては、性別分業の状況は全国の傾向と共通している。筆者がかつて沖縄県浦添市において都市在住夫婦を対象に行った分析では、①家事のほとんどが妻によって行われ、夫の参加度はきわめて低いこと、②家事分担に関する規範意識が夫婦間で少なからずずれていること、③夫の家事参加は夫自身の性別分業規範意識と関連していること、④夫婦ペアの規範意識のずれは若い年齢層ほど大きいこと、などが明らかとなった〔安藤 2006〕。先の調査は夫婦ペアサンプルの分析というメリットはあったけれども、サンプル規模が小さく、その知見の適用範囲はおのずと限られていた。本稿では、沖縄本島中南部全域を調査地とした調査データを使い、まだ全県的ではないがより広範囲な地域を対象として、夫の家事参加の頻度と、これを規定する要因に関して若干の検討を行ってみる。

2. データと方法

本稿で結果の一部を使用する沖縄総合社会調査2006は、筆者が所属する琉球大学法文学部社会学講座の教員（沖縄総合社会調査委員会）による、沖縄本島中南部17市町村の選挙人名簿からの無作為抽出標本（20～64歳）を対象とした調査である（有効標本885人）。以下では、このデータセット（以下、沖縄データ）から、家事参加の項目を使用する。

沖縄総合社会調査2006では、家事参加を測定する質問項目を、日本家族社会学会による「第2回家族についての全国調査（NFRJ03）」と同じフォーマットでたずねた。具体的な質問項目は、「掃除（部屋、風呂、トイレなど）」（以下、掃除）、「食料品や日用品の買い物」（以下、買い物）、洗濯、夕食の支度の4つである。ただし、調査票全体の質問項目数の制約から、「食事の用意」を2003年日本版総合社会調査（JGSS-2003）にならって「夕食の支度」とし、NFRJ03にある「食事のあとかたづけ」は割愛した。回答肢のほうは、NFRJ03のものをそのまま使い、「ほぼ毎日（週6～7日）」、「週に4～5回」、「週に2～3回」、「週に1回」、「ほ

とんど行わない」の5択とした。なお、家事参加の質問は、有配偶者のみにたずねている。また、質問は、回答者本人と配偶者の両方について家事の頻度をたずねた。したがって、配偶者の家事頻度については、配偶者本人ではなく、回答者が認知したものであることに注意されたい。

以下では、沖縄の夫の家事参加を全国データと比較する際に、上でふれたNFRJ03の結果を用いる。このデータセットは学術利用のために一般公開されているが、今回は基本的な傾向を把握するのが目的であるので、NFRJ03についての公刊された成果報告書の巻末に掲載された集計表をもとに数値を算出した。なお、NFRJ調査は全国標本に基づいているので、沖縄県の対象者も当然含んでいるが、その規模は無視できるほど小さい。したがって、この全国調査の結果をもって、沖縄に対する「本土」の傾向とみなすことに支障はないであろう。

3. 夫の家事参加——全国データとの比較から

まずは、沖縄の夫の家事参加頻度を、家事項目別に見よう。表1は、4つの項目それぞれの1週間あたりに行う程度について、「ほぼ毎日」（6.5点）、「週に4～5回」（4.5点）、「週に2～3回」（2.5点）、「週に1回」（1点）、「ほとんど行わない」（0点）を与え、各項目ごとに平均値を算出した。このような得点化を行っているので、家事スコアの集団ごとの平均値は、おおよそその集団が行う家事の週あたり平均回数とみなせる。この方法は、NFRJで夫の家事参加の分析を行った松田〔2006〕に従ったものである。なお、先にも述べたように、質問項目は、夫が自分自身について報告した回答と、妻による夫の家事頻度についての回答の2種類がある。本稿では、両方を検討していく。

表1に示したように、夫回答からみた本人の家事参加頻度は、掃除、買い物、洗濯、夕食の支度の4種類について、0.9から1.4にかけて分布している。一方、妻回答では、夫の家事頻度は夫回答よりも少なく、0.6から1.0ま

表1 夫の家事頻度（週平均回数）

	回答者	N (人)	平均値 ¹⁾	標準偏差
掃除	夫	255	1.0	1.6
	妻	255	0.7	1.2
買い物	夫	256	1.4	1.6
	妻	257	1.0	1.6
洗濯	夫	252	1.1	2.0
	妻	255	0.9	1.7
夕食の支度	夫	251	0.9	1.7
	妻	255	0.6	1.5

1) 単位：回。なお、数値は「ほぼ毎日」(6.5点)、「週に4～5回」(4.5点)、「週に2～3回」(2.5点)、「週に1回」(1点)、「ほとんど行わない」(0点)として算出。

でとなっている。総じて、夫の回答は妻の回答よりも、参加頻度が高く報告されている。NFRJなどの先行調査においても、同様の傾向は見られるが、夫は過大に、妻の回答は過小に評価されている可能性もある。いずれにせよ、夫の家事参加頻度は、夫が回答しても、妻が回答しても、週に1度やるかやらないかといった程度で、きわめて低調である。

しかも、どの家事項目においても、ばらつき（標準偏差）は2未満ときわめて小さい。したがって、平均レベルでの家事参加の低さだけでなく、ばらつきもほとんどないことから、クロス分析を行っても、あまりはっきりした結果は期待できないことを、あらかじめことわっておきたい。

全国データとの比較

では、ここで、沖縄の夫の家事参加頻度を全国のそれと比較してみよう。表2は、沖縄データとNFRJ03データにおける家事項目の参加頻度を出生コーホート別に比較したものである。ここでは、NFRJ03調査における出生コーホート設定に合わせて沖縄データの集計対象を限定してある。この結果からわかるように、全国のレベルと比べると、沖縄の夫は家事を行う頻度が若干高い。ただし、高いといっても、全国で「ほとんど行わない」が大多数のときに、沖縄で「週に1回くらい」が少し多くなる程度の違いである。

一つ注意すべき点として、沖縄データでは無回答が多いことがあげられる。28～37歳の食事の支度のように、10%にもものぼる項目もある。このよう

表2 夫の家事頻度（出生コーホート別、全国との比較）

	沖縄 ²⁾				全国 ³⁾				平均回数 ⁴⁾		(参考) 沖縄 全国 女性 女性 ⁵⁾							
	ほ ぼ 毎 日 N (人)	週 4 回 ほ ぼ 毎 日 N (人)	週 2 回 ほ ぼ 毎 日 N (人)	行 わ な い と 無 回 答	ほ ぼ 毎 日 N (人)	週 4 回 ほ ぼ 毎 日 N (人)	週 2 回 ほ ぼ 毎 日 N (人)	行 わ な い と 無 回 答	沖 縄	全 国								
28-37歳 (1966-75生)	70	7.1	1.4	12.9	34.3	40.0	4.3	347	2.0	2.9	8.9	27.7	57.1	1.4	1.2	0.8	3.8	4.7
38-47歳 (1956-65生)	75	1.3	0.0	2.7	37.3	50.7	8.0	475	1.5	2.9	7.2	24.0	63.4	1.1	0.6	0.7	3.7	4.8
48-57歳 (1946-55生)	93	7.5	5.4	10.8	25.8	44.1	6.5	619	3.1	1.8	7.8	22.6	59.8	5.0	1.3	0.7	3.6	4.8
計	238	5.5	2.5	8.8	31.9	45.0	6.3	1441	2.3	2.4	7.8	24.3	60.3	2.8	1.1	0.7	3.7	4.0
28-37歳 (1966-75生)	70	4.3	7.1	27.1	27.1	27.1	7.1	346	1.2	2.0	12.7	45.1	38.4	0.6	1.7	0.9	3.8	3.9
38-47歳 (1956-65生)	75	1.3	5.3	21.3	30.7	38.7	2.7	475	1.3	1.3	12.0	42.3	41.5	1.7	1.2	0.9	4.4	4.4
48-57歳 (1946-55生)	93	4.3	3.2	19.4	29.0	35.5	8.6	619	3.2	1.8	11.1	33.9	44.6	5.3	1.3	1.0	4.0	4.5
計	238	3.4	5.0	22.3	29.0	34.0	6.3	1440	2.1	1.7	11.8	39.4	42.1	3.0	1.4	0.9	4.1	4.3
28-37歳 (1966-75生)	70	11.4	4.3	8.6	15.7	51.4	8.6	347	3.2	0.9	6.6	9.5	78.7	1.2	1.4	0.5	5.7	5.7
38-47歳 (1956-65生)	75	8.0	2.7	1.3	18.7	65.3	4.0	475	2.7	1.9	5.3	6.1	81.9	2.1	0.9	0.5	5.9	5.9
48-57歳 (1946-55生)	93	7.5	3.2	11.8	15.1	52.7	9.7	619	4.2	1.5	3.1	6.0	79.2	6.1	1.2	0.5	5.4	5.6
計	238	8.8	3.4	7.6	16.4	56.3	7.6	1441	3.5	1.5	4.6	6.9	79.9	3.6	1.2	0.5	5.7	5.8
28-37歳 (1966-75生)	70	5.7	1.4	11.4	15.7	55.7	10.0	347	2.9	2.3	7.2	14.1	72.0	1.4	1.0	0.6	5.8	6.1
38-47歳 (1956-65生)	75	4.0	1.3	13.3	20.0	57.3	4.0	475	4.0	1.9	8.0	15.8	68.8	1.5	0.9	0.7	6.0	6.2
48-57歳 (1946-55生)	93	5.4	1.1	7.5	15.1	61.3	9.7	619	6.1	2.3	6.0	11.8	68.5	5.3	0.8	0.8	6.0	6.2
計	238	5.0	1.3	10.5	16.8	58.4	8.0	1441	4.6	2.2	6.9	13.7	69.5	3.1	0.9	0.7	5.9	6.2

1) 沖縄調査では「夕食の支度」としてたずねている。
 2) 単位：%（特にことわりがない限り）
 3) データは NFRJ05
 4) 単位：回（週当たり）。数値の算出方法は表1に準じる。また、全国データは集計表を元に筆者が算出した。
 5) 沖縄女性は有配偶者のみ

に無回答が目立つ理由は一概にはわからない。回答者が答えを一つに絞れなかったためかもしれないし、あるいは家事をやっていない対象者が無回答にした可能性もある。したがって、有効回答の傾向だけでみて、沖縄の夫の家事頻度が全国に比して高いと結論づけることは差し控えておきたい。まとめていえば、沖縄の夫の家事参加傾向は、全国の場合と大きくは変わらない。参考までに掲げた、女性の行く頻度に照らしてわかるように、全国でも、沖縄でも、家事のほとんどは妻が行っているのに対し、夫はめったにやらないということである。

4. 夫の家事参加の規定要因

本節では、全国との比較という問題を離れて、先行研究で議論されている夫の家事頻度についての仮説が沖縄にもあてはまるかどうかを検討してみよう。ただし、先にもみたように、沖縄のばあいは、夫の家事参加頻度にばらつきがほとんどないことから、クロス分析を行っても、あまりはっきりした結果はでなかったが、それでも本土と似たような傾向性は若干あるので、報告しておきたい。

以下で検討する夫の家事参加の規定要因を、松田 [2006] および石井クンツ [2006] に依りつつ簡単に整理しておく。欧米や日本での研究によれば、夫の家事参加を規定する要因として、労働時間、夫婦の相対的資源、職場環境、代替サポート資源、性別分業観などが指摘されている。残念ながら、沖縄総合社会調査2006は家族に特化した調査ではないので、これらの変数をほとんど含んでいなく、したがって、こうした先行研究における仮説の検証にはかなり制約が伴う。実際、夫本人と妻の就業に関する分析のみが可能である。

まず、一番夫の家事参加を規定する要因として重要と考えられるのは、妻の就業形態（従業上の地位）であろう。当然、専業主婦、非正規、フルタイムの順に、夫の家事参加度は高くなることが予想される。一方、職種の場合

合、大企業ホワイトカラーや公務員では、年休などの制度が利用しやすい、つまり職場の柔軟性が高いので、夫の家事頻度は相対的に低いという予想が一見、成り立つ。しかし、今回の対象者は、実際には非ホワイトの妻は非正規（約7割）が多く、ほとんどこれは就業形態の差に還元されてしまうので、職種は取り上げない。

次に、夫の仕事である。夫が家事に割ける時間を確保できるかという観点からいえば、夫の従業上の地位では、労働時間が長いフルタイム（雇用職および自営業）では、非正規雇用ないし無職に比べて、夫の家事参加頻度は少ないだろう。

本稿では、職種をホワイト（管理・専門技術・事務）とそれ以外（非ホワイト）に分けて違いをみるが、上で述べたように、ホワイトは、非ホワイトに比べて柔軟性が高いと考えられる。したがって、ホワイトの夫は非ホワイトの夫に比べて、家事頻度が高くなると予想される⁽¹⁾。

なお、沖縄データでは、家事参加頻度について無回答が目立つことは先に述べたけれども、以下の分析では、分布の説明を目的とするので、無回答は除外して集計した。では、結果をみていこう。

妻の従業上の地位（表3）では、ほぼ予想通りに、妻が専業主婦、非正規、正規の順に、夫の家事参加度は高くなっている。夫回答では、とくに、洗濯の頻度は、専業主婦の夫は平均週に1度であるが、フルタイムの妻を持つ夫は週に平均2回行っている。ただし、買い物は、逆に専業主婦の夫のほうが有意に高い。フルタイムの妻は仕事帰りに買い物を済ませるのに対し、専業主婦の夫は妻につきあって買い物に行く傾向があるのかもしれない。

妻回答では、4つの家事頻度が、どれも予想通りとなっている。とくに、妻がフルタイムと、専業主婦の場合では、夫の家事頻度は、後者がほとんどしない程度であるのに対し、前者では、週に1度ないし2度行っている。

次に、夫の従業上の地位（表4）では、予想したとおり、夫回答、妻回答ともに、正規職と自営業の家事頻度は、非正規職に比べて少ないことが認め

表3 夫の家事頻度（妻従業上の地位別）

			N (人)	平均値 ¹⁾	標準偏差	F検定 ²⁾
掃除	夫回答	正規職	42	1.4	1.6	
		非正規職	82	0.8	1.2	
		自営	26	1.1	2.0	
		無職	99	1.1	1.7	
		合計	249	1.0	1.6	
	妻回答	正規職	61	1.0	1.5	
		非正規職	59	0.7	1.3	
		自営	24	0.4	0.8	
		無職	108	0.5	1.0	
		合計	252	0.6	1.2	*
買い物	夫回答	正規職	41	1.1	1.3	
		非正規職	82	1.0	1.1	
		自営	25	1.3	1.7	
		無職	102	1.7	1.8	
		合計	250	1.3	1.5	**
	妻回答	正規職	61	1.2	1.7	
		非正規職	60	1.1	1.7	
		自営	24	1.2	1.6	
		無職	108	0.9	1.4	
		合計	253	1.0	1.6	
洗濯	夫回答	正規職	42	2.1	2.6	
		非正規職	82	0.9	1.6	
		自営	24	0.8	1.9	
		無職	98	0.9	1.8	
		合計	246	1.1	2.0	*
	妻回答	正規職	60	1.6	2.3	
		非正規職	60	1.1	1.9	
		自営	25	0.6	1.5	
		無職	107	0.5	1.3	
		合計	252	0.9	1.8	**
夕食支度	夫回答	正規職	39	1.2	1.8	
		非正規職	81	0.6	1.2	
		自営	25	0.7	1.4	
		無職	100	1.0	1.8	
		合計	245	0.9	1.6	
	妻回答	正規職	59	1.0	1.7	
		非正規職	60	0.8	1.7	
		自営	25	0.7	1.8	
		無職	108	0.3	1.0	
		合計	252	0.6	1.5	*

1) 単位：回（週当たり）。数値の算出方法は表1に準じる。

2) **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$, 無記入：n. s.

られるが、その関係は微細なものである。

夫の職種（表5）については、夫回答では、掃除、買い物、洗濯において、予想したような、ホワイトの参加頻度が高い傾向が見られる。逆に、夕食の支度では、非ホワイトのほうがホワイトよりも若干頻度が高い。これも

微細である。

以上から、夫の家事参加頻度に一番関係していると思われるのは、妻の就業形態であった。妻が有職の場合、彼女が仕事で忙しい分、夫が家事を手伝うことになるが、妻が専業主婦の場合、夫の出る幕はほとんどないというの

表 4 夫の家事頻度（夫従業上の地位別）

			N (人)	平均値 ¹⁾	標準偏差	F検定 ²⁾
掃除	夫回答	正規職	173	1.0	1.7	
		非正規職	20	1.1	1.6	
		自営	41	0.9	1.4	
		無職	18	1.6	1.7	
		合計	252	1.0	1.6	
	妻回答	正規職	162	0.6	1.0	
		非正規職	20	1.0	2.0	
		自営	38	0.6	1.0	
		無職	32	1.0	2.0	
		合計	252	0.7	1.2	
買い物	夫回答	正規職	174	1.3	1.6	
		非正規職	19	1.5	1.7	
		自営	42	1.4	1.5	
		無職	18	1.4	1.7	
		合計	253	1.4	1.6	
	妻回答	正規職	162	0.9	1.5	
		非正規職	21	1.5	2.0	
		自営	39	1.2	1.6	
		無職	32	1.2	1.9	
		合計	254	1.1	1.6	
洗濯	夫回答	正規職	173	1.2	2.1	
		非正規職	18	0.9	1.6	
		自営	41	0.8	1.4	
		無職	17	1.5	2.3	
		合計	249	1.1	2.0	
	妻回答	正規職	161	0.8	1.6	
		非正規職	21	1.5	2.4	
		自営	39	0.7	1.6	
		無職	31	1.3	2.3	
		合計	252	0.9	1.8	
夕食支度	夫回答	正規職	170	0.9	1.6	
		非正規職	18	0.8	1.7	
		自営	42	0.8	1.6	
		無職	18	1.1	1.6	
		合計	248	0.9	1.6	
	妻回答	正規職	162	0.5	1.1	
		非正規職	21	0.9	2.0	
		自営	38	0.8	1.8	
		無職	31	1.0	2.1	
		合計	252	0.6	1.5	

1) 単位：回（週当たり）。数値の算出方法は表 1 に準じる。

2) **: $p < 0.01$ 、*: $p < 0.05$ 、無記入：n. s.

が実情であろう。なお、年齢段階による違いも検討したが、明確な傾向は見いだせなかった。

表5 夫の家事頻度（夫職種別）

		N (人)	平均値 ₁₎	標準偏差	F検定 ₂₎
掃除	夫回答	ホワイト	112	1.2	1.9
		非ホワイト	123	0.9	1.3
		無職	18	1.6	1.8
		合計	253	1.1	1.6
	妻回答	ホワイト	106	0.5	0.9
		非ホワイト	112	0.7	1.2
		無職	32	1.0	2.0
		合計	250	0.7	1.2
買い物	夫回答	ホワイト	114	1.4	1.8
		非ホワイト	122	1.3	1.4
		無職	18	1.4	1.7
		合計	254	1.4	1.6
	妻回答	ホワイト	105	1.0	1.5
		非ホワイト	115	1.1	1.6
		無職	32	1.2	1.9
		合計	252	1.1	1.6
洗濯	夫回答	ホワイト	114	1.2	2.1
		非ホワイト	119	1.0	1.9
		無職	17	1.5	2.3
		合計	250	1.1	2.0
	妻回答	ホワイト	105	0.7	1.4
		非ホワイト	114	1.0	1.9
		無職	31	1.3	2.3
		合計	250	0.9	1.8
夕食支度	夫回答	ホワイト	112	0.7	1.5
		非ホワイト	119	1.1	1.8
		無職	18	1.1	1.6
		合計	249	0.9	1.7
	妻回答	ホワイト	104	0.4	0.9
		非ホワイト	115	0.8	1.7
		無職	31	1.0	2.1
		合計	250	0.7	1.5

1) 単位：回（週当たり）。数値の算出方法は表1に準じる。

2) **: $p < 0.01$ 、*: $p < 0.05$ 、無記入：n. s.

5. まとめと考察

以上みてきたように、夫の家事参加は、頻度の水準としては全国の場合と同じく、きわめて低調であった。しかし、本土でも夫の家事参加は低調であるが、ばらつきは沖縄よりも全国のほうが大きかった。つまり、全国では、家事をほとんどやらない夫もいれば、反対によくやる夫もいるのである。そして、先行研究が示すように、夫の家事参加の頻度には、妻の就業状況、代替サポート資源、夫婦の収入差といった、いくつかの要因が影響を及ぼしている。

一方、沖縄では、妻の就業状況による夫の家事参加の違いは、わずかながら認められたけれども、全体的にみれば、おしなべて夫は家事をやらないといつてよい。つまり、沖縄では、本土のように、夫の家事参加の多寡を論じる段階ではない。したがって沖縄社会全体として、低調な家事参加状況をもたらしている構造を、まずは解明していくことが先決であろう。

そこで、本稿を閉じるにあたり、沖縄社会の特質という観点から、今回の結果に対して考察を加えておきたい。先行研究が明らかにしているように、全国では、夫が家事を行わない（行えない）理由は、一つには夫の外部労働に割かれる時間やエネルギーが大きいことに加えて、子どもが小さいうちは、母親が仕事をやめて育児に専念するケースが多いことにある〔松田 2006〕。要するに、それは社会全体での性別分業システムに起因するところが大きい。このような性別分業システムは、科学的な母性観に基づく、女性への人口再生産役割の配分と、男性（夫＝父親）への母子ユニットを養う生計稼得者役割の配分をその内実としている。そこには、性別分業イデオロギーも幾分か注入されているかもしれないが、実質的には科学的・合理的知性によってもたらされている部分が多い。

もちろん、沖縄における性別分業のあり方にも、上で述べたような近代的な特質は含まれていることは否定しない。しかし、沖縄では、そのような近代合理性の根拠は本土に比べれば、おそらく少ない。それには、少なくとも

2つの理由が考えられる。

一つには、沖縄では、家事仕事は女性が中心となって取り仕切るという規則が明確に存在していて、それは先祖供養や屋敷の拝みといった祭祀儀礼と結びついているからである。たとえば、那覇市を中心とする都市的地域でも、仏壇のある家ならば、最低でも月に2度（旧暦の一日と十五日）、さらに盆や正月といった年中行事や、たいていは自宅で行う法要を含めれば、それ以上の回数、仏壇への供え物や参拝客への食事を準備するのは、必ず女性の役目となっている。つまり、沖縄は、家庭内の性別役割配分が祭祀儀礼のそれと高い連続性をもつ社会であると想定してよいだろう。もちろん、仏壇のない家ではそのような規則に従う必要性は薄いかもしれないが、年長の親族に常に取り囲まれている女性は、家事役割についての規範意識を強く内面化していて、それが夫をして積極的に家事にかかわることを遠ざけていると推察される。

第二に、沖縄では、子どもが小さいうちは母親が家で面倒をみるべきといった科学的な母性観が出る幕はあまりないと想像される。その証拠に、沖縄では、未就学児をもちながら母親が働くことへの罪悪感は、全国に比べて著しく低い [安藤 2012]。もちろん、近所に子どもを預かる親がいるということもあるだろうが、沖縄の無認可保育所の多さは、沖縄の人々が必ずしも赤ん坊を母親の手元におかなければいけないとは思っていないことを物語っている。おそらく、第3次産業に著しく傾斜した産業基盤と脆弱な労働市場のために夫の収入水準は低く、それが妻の就労を正当化する条件であることはいままでのない。加えて、女性の労働市場も、大多数の高卒女性の多くが非正規雇用しか参入するしか途がなく、逆説的ではあるが、そのことが、未就学児をもちながら母親が就業する機会を支えているともいえる。要するに、母親の労働市場からの退出によって夫の家事参加が妨げられるといったメカニズムは、沖縄では生じにくいのである。

その意味で、欧米先進国や日本の本土における性別分業が近代型であると

すれば、沖縄のそれは伝統型にとどまっているといえる。とすれば、沖縄が、家事と外部労働の性別分業が解消して、欧米先進国のように夫も家事・育児を担当するような社会に向かうためには、まずは、性別役割配分における宗教的伝統のたががはずれることが必然であろう。その上で、欧米や本土が経験したような近代型性別分業システムを回避することもまた不可欠となる。

注

(1)家事のデマンドを規定するのは、子どもの年齢、すなわちライフステージであるとされる。松田 [2006] が整理したように、アメリカのように、女性が結婚・出産後も働き続けるばあいは、就学年齢の子どもがいることは、夫の家事参加を高めるが、日本では、多くの妻が労働市場から退出するので、このステージでの夫の家事参加は、逆に低調になることが明らかにされている。ただ、沖縄データには、ライフステージを表す変数がないので、この分析は行えなかった。

(2)以下の議論は、あくまでも今後検証されるべき仮説にとどまるものであり、ここで断定的な結論を下すつもりはない。

参考文献

- 安藤由美, 2006, 「沖縄の都市家族における家事遂行とその要因分析」, 琉球大学法文学部人間科学科紀要『人間科学』No.17, 271-287.
- , 2012, 「沖縄の家族意識— 全国データとの比較を通して」, 安藤由美・鈴木規之（編）『沖縄の社会構造と意識』九州大学出版会, 23-44.
- 石井クンツ昌子, 2004, 「共働き家庭の男性の家事」, 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子（編）『現代家族の構造と変容 — 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会, 201-214.

- 岩井紀子・稲葉昭英, 2000, 「家事に参加する夫, しない夫」, 盛山和夫編『ジェンダー・市場・家族』(日本の階層システム 4) 東京大学出版会, 193-215.
- 松田茂樹, 2004, 「男性の家事参加」, 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子(編)『現代家族の構造と変容 — 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会, 175-189.
- , 2006, 「男性の家事参加の変化」, 西野 理子, 稲葉 昭英, 嶋崎 尚子(編)『第2回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第2次報告書 No. 1: 夫婦、世帯、ライフコース』日本家族社会学会 全国家族調査委員会, 35-48.
- 永井暁子, 1992, 「共働き夫婦の家事遂行」, 『家族社会学研究』4, 67-77.
- , 1997, 「家事労働遂行の規定要因」, 樋口美雄・岩田正美(編)『パネルデータからみた現代女性』東洋経済新報社, 95-125.
- 内閣府, 2006, 少子化社会に関する国際意識調査報告.
- 鈴木規之(編), 2008, 『沖縄の社会構造と生活世界 — 二次利用として公開可能なマイクロデータの構築をめざして — 』, 文部科学省科学研究費補助金成果報告書.
- 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子(編), 2004, 『現代家族の構造と変容 — 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会.

参考URL

総務省統計局, 2007, 生活時間配分の各国比較

(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001009957&cycocode=0>)

2011年10月29日